まえがき

竹内敏晴

第一部の、緑さんと子どもたちのエピソードを読みながら思わず笑い、時に涙を流した。

わたしは幼い頃聴覚言語障害児だった。ツンボツンボと嘲られ無視されもした。聾学校というもののあることさえ周囲のだれも知らなかった。あの頃にこういう教室があり、こういう先生に逢えていたら、と思わざるを得なかったのだ。

「ウンコ・タイム」「おばけに燃える男」のやりとりに笑い、ダンゴ虫をのけるのは指でやらないと「（虫が）イタイでしょ」と言うヤッちゃんに賛嘆する。この無垢の世界は障害を持つものに独特の奇妙さとしてしばしば踏みにじられるのだ。

緑さんの仕事「ことばの教室」とはなにか？　吾朗君の章がそのひろがりを教えてくれる。まず、文字かきを嫌がらないように、から始まって、「皮膚触覚過敏」に気づき、顔を洗うことから筋肉トレーニングまで。かつてわたしは中学校の保健室が実は初源的な「ことばの教室」になっている――自分のからだのどこが具合が悪いのかを探りあててやっとことばに表現

できるように促してゆく――ことを知って愕然としたが、ここでは「ことばの教室」が「からだを育てる場」になっている。

だがわたしは読みながら次第に落ち込んでもゆく。サ行とタ行がはっきりしない、サ音がシャとしか発音できない、という、これだけのことを早急に「ナオス」ために、母親たちがこれほど苦しみ、教師がこれほど苦闘しなければならぬとはなんということだろう。人並みでなければならぬという強迫観念がこれほどまでに精密に実現されねば許されない社会とはなんなのだろう。幼い子の成長をゆるやかに見守り変わりうる時期を待つ余裕がこれほど狭くなっている社会――かつて哲学者森有正氏も学校へ上がる頃までことばが出なかったと聞いたことがある。

現代の教育、というより社会秩序の硬直化がここにしわ寄せされている。この息苦しい矛盾の凝縮のさなかで、人と人（子ども）との、じかのふれあいの、まことの火花がほとばしっているのだ。ありがたさと息苦しさで、わたしは笑い、そして涙してしまう。

第二部ではわたしはもう笑わずもう泣かない。その代わり緑さんの生き抜いてきた気迫が身

に迫る。笑いをもたらす明るさと暖かさは、実は幾変転の挫折と立ち直りの末にかちえた力だと知る。

かの女の足どりの中で私はただ一度レッスンにおいて出会う。これによってかの女はそれまで無自覚に信じていた価値観が一気に突き崩されてさまよい始めたと書く。ノイローゼになり夜も眠れず泣き続けた有様を読むと胸が痛い。

知的障害者の学級担当にかわり、後に「ことばの教室」に移ってゆく数年の苦闘は、「ゲド戦記」の主人公の、「影とのたたかい」の彷徨を思わせる。やがて「抱っこ法」に出会い、竹内の講座での学びが「ようやく形になった」とかの女は書くのだが、子どもを外から裁き「指導する」のではなく、また、あるがままを受け入れて立ちつくすのでもなく、ふれあうことによって子の内に棲み、子の目で共に世界に道を見いだしてゆこうとする、その成熟の姿にわたしたちは第一部で出会うことになる。

これは一人の教師の実践の記録というよりは、一人の「人」が人間となってゆく覚醒と努力の道程の表現である。